







文化財の保存と修復

東北の文化財

平成18年**11月11日**(土)

会場 東北歴史博物館・3階講堂
(宮城県多賀城市高崎1-22-1)

主催 文化財保存修復学会

後援 文化庁、多賀城市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、
山形県教育委員会、山形市教育委員会、 NHK 仙台放送局、
 KHB 東日本放送、 SBC 仙台放送、 TBC 東北放送、 MYK テレビ、
 河北新報社、山形新聞社、日本文化財科学会、
北海道・東北保存科学研究会、NPO法人文化財保存支援機構

開 催 趣 旨

過去から未来への時間軸の途上で、人類共通の遺産である文化財を後世へ伝えていくことは、現代に生きるわれわれの責務です。地域社会においては、人々が身近な文化財に触れ、その価値を認め背景を知ることにより、地域との関わりを考え、自らのアイデンティティを確認することができます。実際に地域に伝わる文化財を継承していく上で重要なことは、文化財とその保護に対する世代を超えた市民の理解であり、また活動を実施する上での協力です。われわれ文化財保存修復学会は、文化財の保存や修復を専門とする研究者や技術者の団体であり、長年この分野で活動をしてきましたが、同時に研究成果について、様々な形で社会へ情報を伝えております。

本シンポジウムでは、「東北の文化財」について、縄文以来の東北の歴史や文化、これまでに行われてきた文化財の保存・修復のための活動を紹介し、一般の市民、特に次代を担う若い人たちの理解を促したいと考えています。そして、広く地域社会の文化財の保護に対する意識を高め、今後の展望を俯瞰することを目的とするものです。

会場である宮城県の東北歴史博物館は、歴史や文化の香が漂う地、古代の国府であった多賀城跡に位置しています。このような地でシンポジウムを開催することは、過去を想像する心を養い、歴史に想いを寄せることができ、また今後の東北地方の文化財研究や保存活動を考えるとき、たいへん意義深いと考えています。

東北で初めてのこのような企画に是非ご参加いただき、しばし「みちのくの文化」に触れる時間をもっていただけたらと願っております。

PROGRAM 平成18年11月11日(土)

総合司会●実行委員長／東北芸術工科大学 松田 泰典

10:00～10:05 開会挨拶 文化財保存修復学会会長・実行委員長／九州国立博物館 三輪 嘉六

10:05～10:50 基調講演●東北の歴史と文化財 東北芸術工科大学 入間田宣夫

講演Ⅰ●座長 奈良文化財研究所 村上 隆

10:50～11:20 平泉の文化を世界遺産へ 実行委員長／東北歴史博物館 工藤 雅樹

11:20～11:50 特別史跡多賀城跡の保存と整備 多賀城跡調査研究指導委員 進藤 秋輝

11:50～12:20 東北の文化財をまもる！ 東北芸術工科大学 手代木美穂

12:20～13:30 休憩

講演Ⅱ●座長 元興寺文化財研究所 村田 忠繁

13:30～14:00 特別史跡大湯環状列石(ストーンサークル)の保存 国士舘大学 沢田 正昭

14:00～14:30 地震で被災した歴史資料を保全する 東北大学 平川 新

14:30～15:00 特別史跡三内丸山遺跡とその保存対策 青森県教育委員会 岡田 康博

15:00～15:15 休憩

15:15～16:05 パネルディスカッション『東北の文化財を未来へ遺す』

モデレーター 松田 泰典

パネリスト 三輪 嘉六／入間田宣夫／工藤 雅樹／進藤 秋輝／
手代木美穂／沢田 正昭／平川 新／岡田 康博

16:05～16:15 総括と閉会挨拶 文化財保存修復学会会長・実行委員長／九州国立博物館 三輪 嘉六

東北の歴史と文化財

東北芸術工科大学 入間田 宣夫



平泉藤原氏の居館に廻らされた大堀の発掘風景(1988年)
平泉藤原氏は京都風の寺院建築に邁進するかたわら、在地風の大堀の防御施設を構えていた

東北の歴史や文化を捉えるためには、東北を一括りにして外側から漠然と眺めるのではなく、関東に接する第一地帯から、津軽海峡を媒介にして北海道に連なる第四地帯までに区分することによって、在地の生活感覚に即しつつ、内側から見極めるというアプローチが欠かせない。それによって、自然環境によって条件づけられる南北の格差のうえに、日本国の統治下に取り込まれる度合いによって条件づけられる南北の格差が重ね合わせられるという、東北の歴史・文化の固有の成り立ちを確かめることができる。今回のシンポジウムにおいて、三内丸山と大湯ストーンサークルに対置するに、国府多賀城跡をもってするという企画が採用されている辺りにも、その反映をうかがうことができるであろう。

12世紀に、平泉藤原氏による「国づくり」「町づくり」「村づくり」においては、それら二重の意味における南北格差を踏まえつつ、京都風と在地風、ないしは中央風と地方風、それぞれの要素を、仏教的な理念によって統合するユニークな施策が展開されていた。それによって、鎌倉期以降における「国づくり」「町づくり」「村づくり」のプロトタイプをかたちづくる貴重な歴史遺産が生み出されることになった。そのために、平泉に関する文化財が、京都風、在地風、仏教風、さまざまな色彩を付与されることにもなった。

そのうち、「国づくり」「町づくり」に関する内容については、工藤雅樹氏による講演で十分に触れられるに違いない。そのために、ここでは、「村づくり」の内容に関して、中尊寺領骨寺村を素材として、踏み込んで考えてみたい。それによって、仏教色に染め上げられた日本農村の原風景が生み出され、その文化的景観が今日まで保存されてきた経過を辿ってみたい。

平泉の文化を世界遺産へ

東北歴史博物館 工藤 雅樹



世界遺産条約(世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約・第17回ユネスコ総会〔1972年11月〕採択)にかかわる「世界遺産一覧表記載推薦書」において日本政府がユネスコに推薦する平泉の文化遺産の名称は「平泉 - 浄土思想に関連する文化的景観 - 」である。キーワードは、「浄土思想」と平泉の時代を彷彿とさせる「文化的景観」ということになる。

奥州藤原氏の歴代の当主が造営した壮麗な寺院は、仏教の浄土世界を地上に再現しようとしたもので、都市平泉はそれらの寺院を重要な構成要素とした浄土都市であった。また、とくに毛越寺庭園によく残っている作庭の意匠や技術は、日本独自の要素を多く含んでいる。都市平泉とその周辺には、奥州藤原氏の時代を代表する建造物や庭園のほか、地下には考古学的な遺構が良好な状

表1 「平泉」の構成資産一覧

構成資産	所在地
1 ちようそんじ 中尊寺	いわてけんにしいわいくんひらいずみちよう 岩手県西磐井郡平泉町
2 もつとうじ 毛越寺	岩手県西磐井郡平泉町
3 むりようこうりんと 無量光院跡	岩手県西磐井郡平泉町
4 きんけいざん 金鶏山	岩手県西磐井郡平泉町
5 やなぎのごしよせいせき 柳之御所遺跡	岩手県西磐井郡平泉町
6 たつこのいわや 達谷窟	岩手県西磐井郡平泉町
7 しろうたりたていせき 白鳥館遺跡	いわてけんあうしゅうし 岩手県奥州市
8 ちようじゃがはらはいじあと 長者ヶ原廃寺跡	いわてけんあうしゅうし 岩手県奥州市
9 ぼねでらむらしろうえんいせき 骨寺村荘園遺跡	いわてけんいちのせきし 岩手県一関市

況で残されており、平泉の時代を彷彿とさせる文化的景観も保持されている。

9世紀はじめ朝廷は胆沢城(岩手県奥州市)を築いて多賀城から鎮守府を遷し、東北地方北部の蝦夷を支配するための拠点とした。その結果、陸奥国の南部は多賀国府(多賀城)が直接に、北部は鎮守府が管掌することになり、陸奥国には二つの政治・軍事の中心が並び立つことになった。

10世紀後半から11世紀になると、鎮守府は蝦夷系の豪族の安倍氏、清原氏に掌握され、蝦夷の地域を支配するための鎮守府は、蝦夷の首長の拠り所に変換していったのである。安倍氏や清原氏は、本州北端部にも勢力をのびし、北海道方面との交易を独占して経済力を高め、自立の傾向を示すようになったのである。

安倍氏・清原氏を継承した奥州藤原氏の政権は、鎮守府の管轄領域に加え、多賀国府が管掌する東北地方南部をも支配下におさめた辺境地方政権である。平泉の位置を歴史的に見ると、鎮守府と多賀国府の管轄領域にまたがっており、二つの顔を持つ奥州藤原氏の都にふさわしい。都市平泉は、世界的にいえば国境都市の性格があるといえるだろう。

特別史跡多賀城跡の保存と整備 新たな保存と活用をめざして



多賀城跡調査研究指導委員 進藤 秋輝



多賀城政庁跡
往時の礎石をそのまま使った平面表示による整備が行われ、市民の憩いの場になっている。現在、再整備に向けた発掘調査が行われている

陸奥国と出羽国には通常の任務の他に、蝦夷対策の役割が付加されていた。それを遂行する施設が城柵であり、数多くの「城柵」が設置されている。多賀柵の名で初見する多賀城は城柵の一つであるが、陸奥・出羽両国を管轄する按察使が常駐する陸奥国府でもあった。奈良時代には軍政を扱う鎮守府も併置され、まさに、東北経営の拠点であった。

その遺跡である多賀城跡は南に仙台平野を望む松島丘陵の西端部、多賀城市市川と浮島に所在する。その構成は、儀式をする政庁域とそれを囲む築地で区画された方八町の実務官庁域から成り、南前面城外には道路網で方格に区画された中に国司館などを配置した国府の町並みが東西約二キロ弱、南北0.7キロの範囲に展開している。

多賀城跡は大正11年に国史跡に指定され、昭和41年には特別史跡に昇格した。その後、幾度か追加指定され、現在の指定地全面積は107haに及んでいる。当時の多賀城町が昭和41年から多賀城廃寺の史跡公園化事業に着手し、昭和45年からは宮城県がこれを引き継ぎ、多賀城跡東半部の暫定整備の完成を目指している。完成はまだ先のことであるが、往時の建物群が平面表示され、緑陰に囲まれた佇まいは多賀城跡特有の歴史景観を醸成し、訪れる人々の憩いの場になっている。

このような景観を享受できるのも、遺跡を保存し、継承しようとする地元住民をはじめとする関係者の長年にわたる情熱があったからにほかならない。いま、東北歴史博物館が史跡の隣接地に開館し、史跡を野外博物館として活用している。「史跡の町」を謳う多賀

城市でも、城外南正面の区画整理が終了し、住居域と史跡の区分が明確になった。これまでの保存の歴史を踏まえ、史跡を活かした町作りも新たな段階を迎えている。

4 東北の文化財をまもる！

東北芸術工科大学 手代木 美穂



東北地方は日常生活の中に地域の歴史や風土を垣間見ることができる地域である。東北6県の総人口約1,000万人（東京が1,200万人）、その中に国指定文化財が全国の約5%所在している。約1,000箇所の美術館・博物館・資料館・埋蔵文化財センターなど文化財関連施設に展示収蔵されているほか（平成17年北海道・東北保存科学研究会調査）この数に含めていない各地の図書館・地域公民館には未指定でも特色のある地域文化財が管理収蔵されている。有形・無形にかかわらず文化財が日常生活に溶け込み、通常の営みとして継承されてきたことが所以してか、文化財の「保存」や「活用」などの言葉に対しては突飛なことに感じられてしまうこともしばしばある。しかし、諸先輩方と文化財保存を議論する時「その時にできる方法で文化財を守り伝えてきた」と熱く語られる。これまで人づてに継承されてきた文化財を自然体で保存してきたその風土や手法を今後も継承していきたい。

1970年代からは高速道路の建設などで急増した発掘調査から出土する埋蔵文化財に対する保存活動や整備事業はいよいよ活発化した。その流れの中で文化財の保存・活用のために必要な技術、東北ならではの気候・風土にあった文化財保存についての悩みを共有する場として1999年には東北保存科学研究会（現北海道・東北保存科学研究会）が発足した。会員は現在約60名で東北外在住会員も増えている。年2回の例会と年1回の糖アルコール勉強会や地域出張型の保存科学講座を開催しており、その内容は本学会広報誌にも随時掲載している。その他、度重なる災害による文化財罹災に直面し、防災意識調査や木製収蔵箱に関する研究を進展させ、学会において発表もおこなった。研究会には各地域にまとめ役があり、地域における文化財保存に関する情報などを集めているが、その方々の専門分野が文化財保存科学だけではないことが本研究会のメリットでもある。さらに、東北において文化財保存に携わる方々と認識を深め、高め合える活動として継続していきたいと考えている。



北海道・東北保存科学研究会第12回例会in新潟の風景
各同県持ち回りの例会では現在各地域のホットな文化財に関する情報交換ができる。この会では新潟県内の水浸出土木製品の保存処理後の資料を見せていただいた

東北を示す文化財がまもり伝えられてきたのは地域力ともいえるであろう。郷土史家、まちづくり等のNPOによって、これまでにない文化財活用活動の挑戦も始まっている。東北を故郷とする文化財保存科学従事者のひとりとして、東北の文化財を信頼と支えあいの中でまもり伝える活動を微力ではあるが進めていきたい。

特別史跡大湯環状列石(ストーンサークル)の保存



国士舘大学 沢田 正昭(演者)
鹿角市教育委員会 藤井 安正
(株)アイエステクニカルラボ 井上 オ八

秋田県の北東部、米代川の上流域、奥羽山脈の裾野に鹿角市・大湯環状列石がある。同遺跡は、満座環状列石と野中堂環状列石を主体にした縄文時代の遺跡である。列石の特異な形態、規模などが評価され、1951(昭和26)年、国史跡に指定され、1956年には特別史跡に指定されている、東北地方でも有数の重要遺跡として注目されている。

遺跡の本命はいうまでもなく列石そのものであり、その保存と活用をはかるには従前通りに露出展示を継続することである。そのためには、まず石の劣化抑止の処置、すでに割れた石の接合、微生物(コケや地衣類など)、あるいは汚れによって黒ずんだ石の表面洗浄と汚損の再発防止処置、さらには不安定な石が倒壊しないように、また所定の位置からずれることのないように固定すること、そして土砂や雑草等によって石が埋没するのを防ぐ措置も求められた。本遺跡については、徹底した事前の環境調査を実施し、それにもとづいて保存対策を講じた。他方、保存修復材料の選定にあたっては、地球にやさしい素材、たとえば列石の下部遺構や周辺の土壌を汚染することのないクリーニング材料と強化材を選定することとした。あるいは、そうした修復材料が地中に漏れないように、高吸水性樹脂を敷き詰めるなどの施工技術の検討も行き、遺構への安全性と能率的な施工技術の検討を行った。

本遺跡における一連の修理事業には特に施行後の問題点は見あたらないのだが、撥水効果について次のような問題が残った。すなわち、撥水剤の効果期間には限界があり、できれば数年ごとの継続的な再処理ができるように、関係機関へのご理解と配慮が強く望まれる。

地震で被災した歴史資料を保全する



東北大学 平川 新

震災「後」の活動

2003年7月26日 震度6弱と6強の連続地震発生

・重傷者51人、軽傷者624人、住宅の全壊指定1,276棟、半壊3,809棟

激甚被災地5町を回り、192軒の旧家で被災状況調査と資料保全活動を実施

活動の成果

歴史資料の消滅と散逸の防止

町内の歴史資料所在リストの作成

新史料の発見

公的機関への古文書の寄託・寄贈

経験の蓄積と心構え

明らかになった課題

早急な救済・保全活動の展開

・地震発生後7日目に現地視察、レスキュー開始は2週間後

・「すでに処分した」(焼却や廃棄)という幾つものケース

復興が進むほど歴史資料が処分される

・家屋倉庫等の解体修理のために古文書等を処分

古美術商よりも早く現場に入れるか

行政との関係

来るべき地震・災害に備えて

宮城県沖地震の発生確率 10年以内50% 20年以内90% 30年以内99%

県内の歴史資料所在目録の作成 - 素早く確実なレスキュー活動のために

・「一日型悉皆調査の方法」(宮城方式)の提唱

・市町村の資料所在リストがあれば被災調査やレスキューの早期着手も可能に

・地元の教育委員会や郷土史研究会等との協力関係



被災調査先の旧家で発見された古文書

特別史跡三内丸山遺跡とその保存対策

青森県教育委員会 岡田 康博



特別史跡三内丸山遺跡（空撮）

特別史跡三内丸山遺跡は我が国を代表する縄文時代の大規模集落跡です。縄文時代前期中頃から中期にかけて（約5,500～4,000年前）長期間にわたり定住生活が営まれ、竪穴住居・大型竪穴住居・成人用土坑墓・小児用甕棺墓（埋設土器）・掘立柱建物・大型掘立柱建物・盛り土・捨て場（廃棄ブロック）・粘土探掘穴・道路などが計画的に配置されています。

出土遺物量も膨大で、土器・石器のほかに日本最多1,600点を超える出土点数の土偶、低湿地から骨角器・木製品・漆器や動・植物遺体が大量にしかも良好な状態で出土し、当時の自然環境や生業を具体的に復元することができます。さらにヒスイ、琥珀、黒曜石など他地域との交流・交易を物語る遺物も出土しています。高精度年代測定による暦年代の推定、遺伝子分析によるクリの栽培化など、自然科学的分析によって重要な知見も得られています。当時の集落の全体像、自然環境、生業、精神世界、社会構造などを

考える上で極めて重要な遺跡で、平成12年には縄文遺跡としては44年振りに3件目の特別史跡に指定されています。

平成7年度より遺跡を再公開するとともに、基本構想・基本計画に基づき、復元建物、露出遺構覆屋施設、園路、植栽、駐車場等の便益施設などの整備を行いました。平成14年度にはビジターセンターである縄文時遊館が開館しました。昨年度の見学者数は約34万人で、これまでに450万人を越える見学者が訪れています。ボランティアガイド、情報発信、草刈りなど民間団体が積極的に遺跡に関わっていることも注目されます。

公開以来10年以上が経過し、今年度から露出展示の遺構については現況調査を行い、その分析結果を踏まえて、今後の遺跡整備に活かしていきたいと考えています。

講演者紹介

松田 泰典（まつだ やすのり）

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長 /
同大学美術史・文化財保存修復学科教授

1979年東京農工大学農学部植物防疫学科卒業、81年東京藝術大学大学院美術研究科保存科学課程修了。83年（株）ミキモト入社、真珠研究所勤務を経て、93年東北芸術工科大学芸術学科助教授、99年同教授、2001年より現職。北海道・東北保存科学学会代表、文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会幹事、マテリアルライフ学会編集委員。

専門は文化財保存科学、とくに材質分析、環境化学。現在は東北地方における地域文化遺産の保護・継承に興味をもつ。

2002年マテリアルライフ学会総説賞受賞。

著書に『文化財の寿命を延ばすために』（「マテリアルライフ学会誌」14巻1号、2002）、『文化財のための保存科学入門』（角川書店、2002）、『文化財科学の事典』（朝倉書店、2003）など多数。

三輪 嘉六（みわ かるく）

九州国立博物館館長 / 文化財保存修復学会会長

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同庁文化財鑑査官、日本大学教授を経て、1998年より九州国立博物館設立準備室室長、2005年より現職。文化審議会文化財分科会専門委員、独立行政法人評価委員会委員（文化分科会）をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

専門は考古学、博物館学、文化財学。

著書に『日本馬具大観 ～ 巻』（編著、吉川弘文館）、「家形はにわ」（『日本の美術』至文堂）、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」（『文化財を探る科学の眼5』国土社）、「Horseshin Ancient Times」（『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing）、「文化遺産危機管理的基本課題」（『1999台湾集々大地震 - 古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書 - 台湾国立文化資産保存研究中心）など多数。

入間田 宣夫（いるまだ のぶお）

東北芸術工科大学教授

1966年東北大学大学院文学研究科国史学専攻修士課程修了。山形大学助教授、東北大学教授を経て、2006年より現職。

専門は日本中世史、とくに武家政権成立史。現在は、平泉の政治・経済・文化に興味をもつ。

著書に『百姓申状と起請文の世界 - 中世民衆の自立と連帯 - 』（東京大学出版会、1986）、『武者の世に』（『日本の歴史7』集英社、1991）、『中世武士団の自己認識』（三弥井書店、1998）、『都市平泉の遺産』（『日本史リブレット18』山川出版社、2003）、『北日本中世社会史論』（吉川弘文館、2005）など多数。

村上 隆（むらかみ りゅう）

奈良文化財研究所上席研究員

1978年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科修士課程修了、85年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、88年

同博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所入所、現在に至る。学術博士。文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会評議員。

専門は歴史材料科学。文化財保存科学の視点から、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史的変遷を追求している。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せている。

著書、論文に、『博物館の環境管理』(共訳、雄山閣、1988)、『Japanese Traditional Alloys』(Butterworth、1993)、『色彩から歴史を読む』(共編、ダイヤモンド社、1999)、『文化財は守れるのか』(文化財保存修復学会編、1999)、『金工技術』(『日本の美術』443号)至文堂、2003)、『文化財不可視情報の可視化 - 見えないものを見る視座 - 』(クバプロ)など。

工藤 雅樹(くどう まさき)

東北歴史博物館館長

1961年東北大学文学部史学科考古学専攻卒業、66年同大学院文学研究科国史学専攻博士課程単位取得満期退学。東北大学文学部助手、宮城県多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館・宮城学院女子大学勤務を経て、89年より福島大学行政社会学部教授、2003年定年退官・同大学名誉教授、2004年より現職。岩手県文化財保護審議会会長、「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会委員長、平泉遺跡群調査整備指導委員会副委員長。

専門は北日本の古代史、とくに蝦夷研究。

『古代蝦夷の考古学』『東北考古学・古代史学』『蝦夷と東北古代史』(吉川弘文館、1998)以上の三著により、1999年第8回雄山閣考古学賞。

その他の著書に『研究史・日本人種論』(吉川弘文館、1979)、『古代蝦夷』(吉川弘文館、2000)、『古代蝦夷の英雄時代』(新日本出版社・新日本新書、2000/改訂版平凡社ライブラリー、2005)、『蝦夷の古代史』(平凡社・平凡社新書、2001)、『平泉への道 国府多賀城・胆沢鎮守府・平泉藤原氏』(雄山閣、2005)ほか。

進藤 秋輝(しんどう あきてる)

多賀城跡調査研究指導委員

1969年東北大学文学研究科修士課程修了。東北歴史博物館副館長を務め2004年に退職。宮城県考古学会会長。

専門は歴史考古学、とくに城柵と瓦の研究。

著書に『多賀城発掘』(『古代を考える 多賀城と古代東北』吉川弘文館、2006)、『多賀城創建期の造瓦活動について』(『東北歴史博物館研究紀要』、2003)、『多賀城創建をめぐる諸問題』(『東北古代史の研究』吉川弘文館、1986)がある。

手代木 美穂(てしろぎ みほ)

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター講師

1996年東京学芸大学教育学部小学校教員養成課程理科学科化学専攻卒業、98年東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存科学修了。仙台市教育委員会発掘調査作業員、東北大学工学部工学研究科超臨界溶媒工学研究センター技術補佐員、化学・バイオ系助手、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター研究員を経て、2005年より現職。2003~05年北海道・東北保存科学研究会事務局。

専門は文化財保存科学、とくに埋蔵文化財の保存処理および材質分析。現在は金属製品に付着する鉱物化した繊維製品の変質機構に興味をもつ。

2005年繊維学会若手ポスター部門ポスター賞受賞。

村田 忠繁(むらた ただしげ)

(財)元興寺文化財研究所総括技師

1977年駒澤大学文学部地理学科卒業。(財)元興寺文化財研究所入所後、情報室長、出土金属製品保存処理室長、文書修復室長、歴史民俗資料研究課長を経て現職。文化財保存修復学会行事・災害対策担当運営委員、種智院大学非常勤講師。

専門は文化財保存修復、とくにX線を用いた非破壊検査による状態調査や真空凍結乾燥の応用。現在は被災文化財の救済や防災への取り組みに興味をもつ。

著書は『被災資料の救済から何を学ぶのか』(『地方史研究』第55巻5号 地方史研究協議会、2005)、『歴史を映すX線透過試験』(『非破壊検査』第54巻7号 非破壊検査協会、2005)、『文化財防災の教訓と展望 - 阪神・淡路大震災から10年 - 』(『元興寺文化財研究所研究報告2004』、2005)、『文化財を遺す非破壊検査技術』(『検査技術』vol.11 no.5 日本工業出版、2006)、『『文化財防災ウィール』利用のすすめ』(『資料保存と防災対策』全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、2006)など。

沢田 正昭(さわだ まさあき)

国士館大学21世紀アジア学部教授

1967年金沢大学教育学部中等教育学科卒業、69年東京芸術大学美術研究科保存科学専攻修了。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長、筑波大学大学院・人間総合科学研究科・世界遺産専攻教授を経て、2006年より現職。文化財保存修復学会諮問委員、日本文化財科学会会長。

専門は文化財の保存科学、とくに遺跡の保存と活用。現在は古代壁画の分析と保存に関心をもつ。

著書に『文化財の保存科学ノート』(近未来社、1997)、『最近発見された古代壁画の分析と保存』(『遺物の保存と調査』クバプロ、2003)、『考古科学研究の最新成果 - 横断型研究の視点 - 』(『科学が解き明かす古代の歴史』クバプロ、2004)がある。

平川 新(ひらかわ あらた)

東北大学東北アジア研究センター教授

1980年東北大学大学院文学研究科修士課程修了。東北大学文学部助手、宮城学院女子大学助教授、東北大学教養部助教授を経て、96年より現職。

専門は日本近世史。

著書に『伝説のなかの神』(吉川弘文館、1993)、『紛争と世論 - 近世民衆の政治参加』(東京大学出版会、1996)、『近世日本の交通と地域経済』(清文堂出版、1997)、『郡中公共圏の形成』(『日本史研究』511号、2005)、『災害『後』の資料保全から災害『前』の防災対策へ』(『歴史評論』666号、2005)などがある。

岡田 康博(おかた やすひろ)

青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室室長

1981年弘前大学教育学部卒業。81年青森県埋蔵文化財調査センター勤務、95年県教育庁文化財保護課に異動、2002年より文化庁記念物課文化財調査官となり、06年4月より現職。

専門は縄文時代の考古学、とくに集落論。最近では環日本海の先史文化に興味をもつ。

2000年司馬遼太郎賞受賞。

著書に『縄文鼎談三内丸山の世界』(山川出版、1996)、『縄文人がおもしろい』(NBCセンター、1996)、『縄文の宇宙・弥生の世界』(角川書店、2000)、『遙かなる縄文の声』(NHK出版、2000)、『縄文文化を掘る - 三内丸山遺跡からの展開 - 』(NHK出版、2005)など著書、論文多数。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にあって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

(「入会のしおり」より)

文化財保存修復学会の連絡先

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学 光葉博物館内
Tel : 03-5432-0620 Fax : 03-5432-0622
E-mail : jsccp@sepia.ocn.ne.jp
URL : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsccp/>

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長 三輪 嘉六
副委員長 工藤 雅樹 松田 泰典
委員 西浦 忠輝 村上 隆 村田 忠繁
神庭 信幸 坂田 雅之 及川 規

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復 九州の文化財

文化財保存修復学会編 / B5変形判 / 112頁
ISBN 4-87805-076-4 C1070 / 定価：本体価格1,400円 + 税
平成18年6月3日第1版発行

本書は平成17年11月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 九州の文化財」の講演収録集です。

基調講演 九州で始まった文化財保存 文化財保存事始め
文化財保存修復学会会長 / 九州国立博物館 三輪 嘉六

九州装飾古墳の世界 顔料から日本美術の源流をさぐる
東京文化財研究所 朽津 信明

語り継ぐ遠の朝廷の物語 太宰府天満宮の歴史と文化財
太宰府天満宮 味酒 安則

何のために掘るのか 大宰府史跡の保存と活用
九州国立博物館 赤司 善彦

環境・災害 風化と戦う 大分の石造文化財を護る
大分県立歴史博物館 山田 拓伸

被害状況とその後の対応 2005年3月20日、福岡県西方沖地震と文化財
福岡市教育委員会 三木 隆行

地域でまもり伝える文化財の修理 文化財保存教育の現場から
別府大学 篠崎 悠美子

文化財の保存と修復 九州国立博物館の役割
九州国立博物館 本田 光子

パネルディスカッション

文化財の保存と修復 伝統ってなに？

文化財保存修復学会編 / B5変形判 / 108頁
ISBN 4-87805-058-6 C1070 / 定価：本体価格1,400円 + 税
平成17年5月13日第1版発行

本書は平成16年10月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復 伝統ってなに？」の講演収録集です。

基調講演 文化財と伝統

文化財保存修復学会会長 / 九州国立博物館 三輪 嘉六

遺すべきもの、失われるもの 文化財としての絵画の修理と「伝統」
文化庁 鬼原 俊枝

伝統の技と新技術 よみがえる仏

(財)美術院 藤本 青一

法界寺壁画の事例 表具技術で壁画を救う

(株)岡墨光堂 岡 泰央

装演技術で直す 海外に根付いた日本の伝統
オランダ国立民族学博物館 フィリップ・メレディス

日本庭園の伝統と保存 成長する芸術

京都造形芸術大学 仲 隆裕

美しく「しまう」 博物館が継承した「伝統」

京都国立博物館 森田 稔

パネルディスカッション

<問い合わせ先>

(株)クバプロ内「文化財の保存と修復」事務局

〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F

E-mail : bunkazai@kuba.jp URL : <http://www.kuba.co.jp/>

TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837